

## 大腸がん検診について

平成30年4月放送

戸川 保

日本では年間約5万人の方が大腸がんで亡くなっており、死亡者数は胃癌を抜いて第2位となりました。福井県でも高齢化の進展もあり、がんに罹る方は増加傾向にあります。がんの部位別では、福井県においても大腸がんは男女ともに2番目に多いがんとなっています。今回は大腸がんを早期に発見するために行われている大腸がん検診についてお話しさせていただきます。

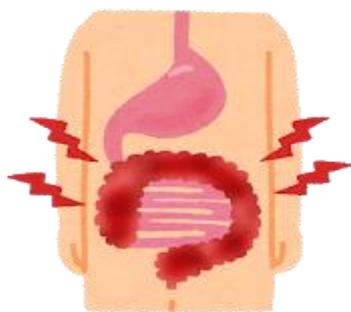
大腸がん検診の対象者は男女とも40歳以上の方で、受診間隔は年に1回、問診と便潜血検査を行います。無症状のうちに検診を受診した方では早期の大腸がんが発見される可能性が高く、その段階で治療すればほぼ治癒が可能です。一次検診で便潜血が陽性と判断された方には、精密検査を行います。

一次検診で行われる便潜血検査とは、便の中に血液の反応があるかどうかを調べ、大腸のどこかに出血がないかを調べる検査です。出血があるから全てがんであるということではありませんが、出血の原因を調べるために精密検査が必要になります。



精密検査には大きく分けて大腸内視鏡検査と注腸X線検査がありますが、大腸全体を内視鏡で観察する全大腸内視鏡検査がお勧めです。全大腸内視鏡検査は、検査前に腸の内容物（便）をきれいに洗い流したのちに、肛門から内視鏡を挿入し、大腸の始まりの部分である盲腸まで観察します。大腸がんだけでなく、小さなポリープやわずかな出血等も発見可能ですし、場合によってはその場で治療することもできます。全大腸内視鏡検査はかつて非常に苦痛を伴う検査とされていましたが、内視鏡機器の進歩や検査数の増加による医師の技術向上もあり、現在では受けていただきやすい検査となってきています。

平成28年度の福井県の大腸がん検診の状況をお話ししますと、県全体で検診受診者は約38,000人、このうち精密検査が必要と判断された方が約1,900人(5%)、実際に精密検査を受けた方が約1,400人(必要と判断されたうちの73%)、



がんが見つかったかたが59人(精密検査受診者の4.1%、検診受診者全体の0.16%)いらっしゃいました。大まかにいうと、1万人の方が一次検診を受診すると大腸がんのかたが16人ほど見つかった計算になります。大腸がん検診の現在の問題は、受診が対象者の50%程度であることと、精密検査が必要とされ

た方の実際の受診率が80%以下であることと思われま

す。先ほども述べましたが、大腸がんは早期にみつかれば、ほぼ治癒が可能ですし、やや進んだ状態であるステージ3(ステージは1から4まで、数字がふえるほどがんが進行した状態)であっても80%以上の方の治癒が望めます。大腸がん検診は、一次検診が便を提出するだけとほとんど苦痛がなく、検診の効果も科学的に証明されており、しかも見つかったがんが治ることも十分期待できます。いままで検診を受けたことのない方もぜひ受診を検討してみてください。